

内観ニュース

第34号

発行所
日本内観学会〒702-8508
岡山市浦安本町100-2
慈生病院

第三十三回日本内観学会長崎大会を終えて



三和中央病院 塚崎 稔

平成二十二年六月二十五日から二十七日の三日間、長崎市のブリックホール国際会議場にて第三十三回日本内観学会を開催いたしましたのでご報告いたします。

今大会を開催するにあたっては、一昨年の十月に奈良県で開催された内観療法ワークショップに参加したときに、北陸内観研修所所長の長島正博先生より「再来年に長崎で内観学会大会の開催をぜひお願いします、私もご協力いたしますから。」と突然に頼まれて、「はい」と返事をしたことがきっかけでした。私は長島先生と相談し、内観法とスピリチュアリティについてパネル討議を試みたいと打診したところ、先生は大変喜んで下さり、パネリストの役も心よくご承諾頂きました。しかしその後、長島先生は病気で闘病生活を余儀なくされ、大会に参加できなくなりました。この連絡があり安否を見守っていましたが、大会が開催される約一ヶ月前の五月二十一日にご逝去されました。私にとって最大の衝撃でありました。長島先生が喜んで下さっていた長崎大会へお呼びできなかったことは残念でなりません。きつとあの優しいまなざしで見守ってくれていたと思います。ここよりご冥福

をお祈りいたします。

そのようなことで、昨年から実行委員会を立ち上げ、大会開催の準備を進めて参りました。私たちは今大会をここ長崎市ではじめて開催することができたことを大変嬉しく思います。内観を医療の場だけで応用してきました私たちにあって、もっと長崎の人たちに本来の内観の素晴らしさを知っていただければということが私たちの願いだったからです。その願いを叶えてもらうように、今大会では十七題の演題の応募があり嬉しい悲鳴を上げました。また、教育講演では長崎県臨床心理士会会長の児島達美先生よりナラティブと内観療法の関係性についてご講演いただきました。特別講演では、臨床で独自の内観的エッセンスをお持ちの高口憲章先生に、内観についてご存じない方にも、とても分かりやすく、かつ楽しいお話をしていただきました。

私たち実行委員会では今大会のメインテーマを「この年の平和を求めて」といたしました。ご承知のように、長崎は原爆によって多大な被害を受けました。それゆえ、平和を愛する心をとて大切にしてきました。内観においても基本的理念は同じだと思います。他者に対して自分がどうであったか、自分自身を見つめ直すことが平和な社会の実現に必要と考えます。公開講座では長崎純心大学学長の片岡千鶴子先生に、永井隆博士の生き様を通して、この平和について考えてみる機会を与えていただきました。

かつて外国との唯一の窓口であった長崎では、西洋文化や中国文化がチャンポンとなり、人々は他文化に溶け込んで独自の人間関係を形成してまいりました。それは、他国の人を自由に快く迎え入れ、おもてなしするという文化でもありました。今大会には中国と韓国からも多くのご参加があり、お互いに心通い合う対話ができたと思います。まさに国と国との平和な関係が内観によって結ばれているのだと感じました。

最後に、日本の最西端にある長崎という地に遠路おこし頂きました皆様方に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

パネルディスカッション 傾聴記



多布施内観研修所 池上 吉彦

人は身体だけで生きていくわけではありません。人は心でも生きています。そして生死の境から人だけが魂の存在を見出し、今学会第一日目のパネルディスカッションは「スピリチュアリティーの意味」でした。

まず司会の塚崎三和中央病院長すなわち今大会長の方から、設定の理由が説明された。長崎で開いた内観療法ワークショップの中で「内観は病を治したり悩みを解決したりするだけでなく、もっと深いところでの自己改革が起こっているのではないか。それは内観の本質的なテーマにつながる」という論議があったからだそうです。

最初のパネリストは長崎ウエスレヤン大学の内村教授です。「生死学から観たスピリチュアリティー」で、スピリチュアルケアに携わり、臨床死生学から言うスピリチュアルペインから出発すべきとおっしゃる。なぜ私が死なねばならぬのかという苦しみの中で人は弱さや脆さを隠そうとするが、むしろ傷付き易さこそが大切だと言ひ、元々キリスト教思想史で精霊論が御専門なのでキリスト最後の言葉「エロイエロイラマサバクタニ神よ神よ見捨てたまうか」という絶望の叫びの後我を捨てて神に身を委ねたのは、捨てられる自分を受け入れたのだという。ルターの「地獄への自己放棄」や親鸞の「地獄は一定すみかぞかし」など引かれ、傷付き絶望し、そして自己超越するのをスピリチュアリティーと置き換えられるのではないか、とおっしゃったような気がします。私は先生の話をお聞きしていて、吉本先生の「世界中の人が皆助かって私だけは地獄に堕ちたらんと本当に分かったときコロナコロナ転がりワンワン泣いて喜んだ」という述懐につながりました。

次は「伝統的ヨーガから観たスピリチュアリティー」という題で

日本ヨーガ療法学会の木村理事長。東洋的な智慧の真つ只中の印度の立場からスピリチュアリティーの意味に触れていきたいとおっしゃり、スピリチュアリティーは自己アイデンティティー・自己同一性だとおっしゃる。昔の人は自らの帰属すべき場所を、センスのいい人の作った神話・叙事詩等に落ち着けた。現代はいかなる生物も二重螺旋のDNAに落ち着けそうだがまだ謎が多く、命はどこから来て今何なのかの答えにはならない。ヨーガというと、ヨーガは結び付けるという意味で、自分を根源的なものに結び付けるのだとおっしゃる。それにはダイアーナとオームを重ねるのだそう。ダイアーナは禅定、オームは同意すること。天がそうされるなら、個の自己存在を失くし天に自己アイデンティティーを求めて同意するという。内観は自己アイデンティティーを母に求めたのだと言われたところからお話がすつと入ってきました。ヨーガにおける自己アイデンティティーがスピリチュアリティーと深く結びつくものと思うとおっしゃった。豊富な学識・厳しい実践・深い研究が思われます。

そして、「医学・医療の立場から観たスピリチュアリティー」を指宿竹元病院 竹元院長。医療の世界でスピリチュアリティーが出たのはアルコール依存症回復のための自助グループAAの12ステップの「霊的目覚め」だそうです。これを作ったボブとビルは神だったので、ハイヤーパワーと表現したそうです。この12ステップのうち6ステップは全く内観と同じらしい。キューブラ・ロスの「死は霊的進化を理解する扉」を紹介され、スピリチュアルグロスという言葉を教わり、長島先生が腫瘍で死に直面し魂の目覚めを体験された話をされた。内観とスピリチュアルの匂いが嗅げるのではないか、と言われた。5月21日に長島先生は御逝去された。

ディスカッションは割愛して、コメンテーターの異日本内観学会理事長の言葉を抄録します。「スピリチュアリティーは言語では表現できない命の働きそのものです。また心の虚しさに喘ぐ若者にとってスピリチュアリティーはマインドコントロールを呼ぶ危険性があります。それに内観面接の操作性・支配性に入る無意識レベルでの危険性のあることも心すべきでしょう」。有難うございました。

学会シンポジウムに参加して思ったこと



盛岡大学 門屋 隆司

長崎は、7年前に或る少年が起こした衝撃的な事件の舞台でもある。司会の小澤寛樹先生のその言葉で今回のシンポジウムが始まった。掲げられたテーマ―現代の若者のところを考える―を改めて実感させられるオープニングであったと思う。

内観創始者の吉本伊信先生とご自身の出会いを「盲亀の浮木」に例えられたのは、多布施内観研修所長の池上吉彦先生である。17歳だった一高生藤村操が日光華嚴の滝に身を投じたのが明治三十六年。それから百有余年後の現在も、若者のところには藤村操と同じような情動が蠢いている。三十六年間にわたって高校生と真摯につき合い、そして自分自身と真剣に向き合ってこられた先生の口から発せられるその言葉はとても重く、「近頃の若い者は・・・」という言説とは全く無縁である。若者から人類全体へ、そして野生動物にまで考察は及ぶ。脈拍の回数が15億に達する頃が野生動物の寿命だという。人間でいえばおおよそ40歳代であり、藤村操が生きた時代の平均寿命に相当する。その後、平均寿命は急激に上昇カーブを描いていく。そして、壮年になっても、老年になっても、人は若者時代のシッポをひきずりながら生きていくことになる。池上先生の中にも、私たちの中にも、藤村操の葛藤がいまだにくすぶっているのだろう。

三和中央病院の精神科医松本喜代隆先生は、「向き合う」を切り口として、「現代」「若者」「ところ」の三つの言葉を読み説いて行かれた。若者という時代の扉を開いてしまった思春期の子どもたちは、否応なしに自分のカラダとところ起こった変化と向き合わざるをえない。その変化は、自分の意思とは無関係に最終して固定され、時として残酷でもあり得る。その結果を受け入れるのは容易なことではない。そんな風にして若者と呼ばれる時代が始まるのだ。しかし一方で、「向き合う」ことにあまり価値を置かないのが現代の特徴でもある。余生が長くなり、経済的に成熟した社会は、自分と向き合うことを先送りするモラトリアムを必然的に生む。藤村操の時代には平均寿命であった40歳代は、現代ではいまだに青年期の中にあるとも言える。この変化

は、自分を見つめすぎるために発症した(藤村操が生きた)時代から、自分を見つめなさすぎるために発症している時代への変化として、つまり、統合失調症の軽症化として捉えることも可能かもしれない。

そんな風潮の強い現代にあっても、犯罪に手を染めてしまった若者は、少年院という場所で自分自身の内面と「向き合う」ことを強いられる。青年期の「不可解さ」から生じる葛藤を内に向けたのが藤村操であるとするなら、自分の意思とは無関係に始まる思春期の変化への苛立ちを外に向けてしまったのが、非行少年と呼ばれる若者なのかもしれない。佐世保学園上席専門官である長増敏洋先生は、少年院という場所で、そんな彼らと三十年以上も一緒に過ごしてこられた。彼らが自分のカラを破るためには本当の感情認知が必要であるという先生の言葉の中から、吉本伊信先生のものでご自身の内観体験を読み取るのは穿ちすぎであろうか。少年たちの変化のキッカケは、家族との面会や手紙のやり取りだという。社会の諸相には様々な変化が見られたとしても、人間存在の根底を支えるつながりは変わらない。そんなメッセージに聞こえた。

80年代以降に出生した中国の若者を「現代青年」と呼称するのだという。その80年代以降、中国では自殺者数が増加の一途をたどってきた。それは、物質的な豊かさを追い求める方向にシフトしたライフスタイルと歩調を合わせるようでもあり、60年代から日本が歩んできた道とも重なっているように見える。上海交通大学の王祖承先生が示してくださった詳細なデータから、その感を強くした人は少なくなかっただろう。多くの「現代青年」が不安障害に苦しんでいるというが、それは何から来る不安なのだろうか?日本の若者と同様にネットの仮想空間に浸り、携帯を通して援助交際に行ったとしても、彼らの抱える不安の深層は、藤村操が抱いた「不可解さ」とどこかで通じているとは言えないだろうか。

対人関係に障害を示す「現代青年」にとって、今は生きやすい時代なのかもしれない。コメントーターである奈良女子大学の真栄城輝明先生はそう語った。自分や社会と「向き合う」ことが難しい若者は、バーチャルな世界に、あるいは解離という症状に、一種の居心地の良さを見出しているとも言えよう。それは、藤村操の内向きの解決法とも、非行少年たちの外向きの発散とも質を異にするものだ。若者のところは或る意味で時代を反映する。けれども、魂はきつと、時代の変化の向こう側で常に一点を見続けているであろう。

児島達美先生の教育講演をお聞きして



石越病院 精神科 友成 宏

第三十三回日本内観学会長崎大会で、児島達美先生による教育講演を拝聴させていただきました。テーマは「ナラティブ（語り）からみた内観療法」。言葉が心をつくる「ということ」でした。

以前「心理療法の本質―内観療法を考える」（日本評論社）で児島先生が家族療法やブリーフセラピーからみでの内観療法を考察した論文を読ませていただいたことがあり、「余計なお世話はしない内観法」というフレーズが大変新鮮に感じられました。家族療法を「システムズアプローチ」として説明しておられたのも非常に分かりやすく、勉強になりました。今回はナラティブ・モデルによる心理療法と内観療法との関連をお話してくださるとのこと、とても楽しみにしておりました。

近年、「ナラティブセラピー」や「ナラティブ・ベイスド・メディスン」など、ナラティブという言葉聞く機会は確かに増えてきているのですが、意味しているところは何となく分かるような気がするだけで、正確には理解できていないのではないかと、この思いも抱いておりました。児島先生の講演は、まず「ナラティブとは何か」との説明から始まったので、そのような不安はすぐに消えました。最初に「物語的自己（セルフ・ナラティブ）」についての説明があり、人間は元来、自己という感覚を持っているのではなく、自分の様々な記憶や経験、将来の展望や不安に言葉を与え、そのような断片を結びつけ筋立てることによって自己を生み出す、というお話を聴いて、思わず「始めにロゴスありき」との

新約聖書の一節を連想いたしました。

次には「語る行為」としてのナラティブが解説されました。聞き手の存在を前提としてのナラティブは、聞き手との相互作用によって語り直され、まだ語られないストーリーが浮かび上がってくる、との説明を聞いて、私自身も内観中は、最初の頃は面接者が来たら何を報告しようかと考えて面接者への語らいを思い描きながら、いつの間にか自分自身と語らっていたような気分を何度も感じたことを思い出しました。

ナラティブ・モデルでは、人は誰でも自分の人生についての物語を書きながら生きており、物語によっては生きやすくも生きにくくもなるという考え方にに基づき、その物語の書き換え・語り直しを促していくとのことでした。内観でも語り直しを促進する独自の治療構造がある、と先生は指摘され、淡々と具体的な事実のみ内観するようにとの面接者の指示は、他の心理療法が情緒性をより重視しているのと対照的であり、また面接者が積極的な傾聴をするのではなく、ある距離感を保っており、「余計なお世話はしない」姿勢でいるのも特徴的であると解説されました。心理療法に詳しくなくても実に分かりやすく納得させられるものでした。他の心理療法は内観に比べると面接者とのやり取りがもっと多いようですが、内観では面接者の「聞かせていただく」とのスタンスのもとで、内観三項目に従って事実のみ調べていくようにとの指示を繰り返し受けることによって、物語の書き換えが促進されると考えられ、内観面接者の独自のスタンスと指示応答とが大きな意義を持っていると先生は指摘されておられました。内観療法の治療機序を考える上で、とても興味深く感じました。

今回の児島先生の講演は、御自身の主観や思い入れの少ない、客観的な説明が多かったため、尚更思い当たるところも多く、実に面白く勉強になるお話でした。自分の勉強不足を痛感しながらも、内観療法やナラティブセラピー、精神療法に対する向学心を刺激いただきました。本当にありがとうございました。

「ワークショップ印象記」

「いっしょ」と「からだ」のつながりを考える

奈良女子大学 真栄城 輝明

表題は、平成二十二年一〇月三十一日～十一月一日に青森県弘前市で開催された第二一回内観療法ワークショップ（竹中哲子実行委員長）の大会テーマである。参加者の視点で、当日の印象を思いつくままに述べてみよう。

まず、大会テーマである。開催地の弘前市は通称「つながる」と呼ばれている。「な」とは、津軽弁で「あなた」という意味だ。「つながる」に「な」を足して「つながる」という言葉に仕立てたうえでテーマにしたようだが、そこには、実行委員長はじめ実行委員各氏の期待が込められていると伺った。

すなわち、県内はもとより、県外や内観関係者以外からも参加者を迎えて、できるだけたくさんの方々と「つながる」ような、そんなワークショップにしたい、という意気込みが感じられたのである。実際、プログラムにもそれが表れている。

たとえば、初日から内観実習の時間を設けたのもその表れであり、実際、参加を決めた動機に「内観を体験したい」を挙げた参加者が少なくなかった。二日間で約五時間半の内観実習に入る前に、「内観入門」と題する教育講演（本山陽一氏）が行われたことは、初心者には親切なことであった。さらに、内観実習の時間と並行して、大会テーマを掲げたシンポジウムを進行したことは、すでに内観を体験したことのある参加者には嬉しいことであった。精神医学の立場から塩路理恵子氏、ヨーガの立場から木村慧心氏、スポーツの立場から小泉洋氏、そして、指定発言者には日本内観学会の巽信夫理事長が登壇し、それぞれの専門家による最新の知識が披露され、参加者も満足したようだった。

シンポジウムの余韻が漂う中で、特別講演（筆者）が夕方の六時

半まで行われているが、疲れを覚えるどころか、津軽三味線の演奏も加わって、最後のプログラムとなった懇親会は一気に最高潮のお祭りとなり、司会者の巧みなリードで参加者全員が腕を組み、「花」を合唱した。

二日目の朝は、ヨーガ体操から始まった。そこにも準備委員の心憎い演出があつて、心身共にリフレッシュして前日からの内観実習に入ることができたが、昨日のシンポジウムに代わって二日目は、分科会が同時並行して行われた。「家庭教育問題を考える」会場には、臨床心理士の門屋隆司氏と教師の佐々木真氏が、「医療における内観の有効性」をテーマにした会場では、精神科医の須藤武行氏と巽氏が講師として参加者の質問に答えている。その時間帯に、筆者は割り当てがなく、フリーであったので、各部屋を順番にのぞかせてもらった。すると、どの部屋も参加者からの質問が活発になされ、かなりの盛り上がりを見せていた。

その後、プログラムは、昼食を挟んで体験発表が行われた。発表者は、娘が不登校になったことが機縁となって親子で内観を体験した女性教師である。苦しい胸の内を詩に託しているうちにとうとう詩集まで出版したらしく、当日は、いくつかの詩が披露され、参加者に感動を与えた。

最後は、古武術家として活躍し、全国的にもよく知られた甲野善紀氏を特別講師に招いて、記念対談が行われた。対談の相手を務めたのは筆者であるが、当日の舞台裏を話せば、全くの打ち合わせなしで出たとこ勝負の本番であった。したがって、幕が上がるまで不安な気持ちで支配していたが、案ずるより産むがやすしとはよく言ったもので、なんとか与えられた役目を終えることができた。

私の役目は、聴衆を代表して甲野氏の話しに耳をすますことだと自覚していたので、それに徹することにした。当初、参加者は、百名を予定していると聞いていたはずなのに、甲野氏の知名度が人を集めたらしく、会場には、二百一名が押し掛けていた。参加者の中には、甲野氏の実演に積極的に、飛び入りする者も現われ、盛況のうち閉幕となった。実行委員各氏のご尽力に感謝したい。

長島正博先生を偲んで



慈圭病院 堀井 茂男

(日本内観学会事務局長)

昭和52年9月、私が内観研修所を初めて訪れたとき、吉本伊信師はテープの編集をされていた手を休め、笑顔で出迎えて下さり、荷物の整理もそそくさに法座に案内されて集中内観がはじまりました。私が長島正博先生とお会いしたのはそのとき面接して戴いたのが最初です。先生は当時吉本師の片腕として研修所で修行されておられ、作務衣、丸坊主で頭を日本タオルで覆い、てきばきと動かれていました。毅然とした、背筋の伸びた姿勢、しかしにこにこ人懐っこいやさしさも感じさせる態度で指導して戴き、お地藏さんのような方がおられる、と思ったことでした。

長島正博先生は富山の高校を卒業後、開拓者養成の学校に5年、カトリックの禅道場でドイツ人の神父に禅の手ほどきを受けられ、その後山口県の臨済宗の寺で4年修行された後、昭和51年より吉本伊信夫妻のもとで9年間研修のかたわら助手として勤められ、その間、1万人以上の内観者の面接を指導、体験されています。縁があつて、昭和57年に美稚子さんと結婚された後も、夫婦で内観研修所に助手として勤めるとともに修行、研修をされ、研修所開設の態勢を作りあげられた昭和60年春に北陸内観研修所を開設されました。そして平成5(1993)年、現在地に新居移転され、年間約300人前後という多くの内観者の面接指導をされてきていたのです。

富山は、長島先生のふるさとであり、草野亮先生や吉本博昭先生の地元、特に吉本博昭富山市民病院精神科部長が高校の同級生であったと云うこれまた巡り合わせの因縁を感じさせる協力者を得て、北陸内観研修所は順風満帆に運営、発展してきています。が、当初は内観者の獲得にも苦労され、長島夫婦の地道な実際の努力は並大抵のものではなかったと思われます。

長島先生や草野亮、吉本博昭先生のお世話で、昭和63(1988)年、北陸で初めての日本内観学会大会(第12回)が富山市で開催されました。この大会を契機に北陸内観懇話会、通称「さわやか会」が創

設され、平成元年8月より2ヶ月に一度、富山市民病院で開かれています。この会の運営には吉本先生と共に長島先生の支えがあつてのことであるの言うまでもありません。この頃、北日本新聞のエッセイ「こころのかたち」を2年間にわたり掲載し、地域の内観普及に大きな力となつていきます。また、先生は、昭和60(1985)年開催の内観懇話会が、日本内観研修所協会に発展していく大きな力となり、「自己発見の会」の発足、その会誌「やすら樹」誌の刊行にも協力をされてきています。

思えば、長島先生は、中学3年の時の内村鑑三の「後世への最大遺物」との出会いから、「生きる意味」自分探しの旅が始まり、吉本伊信師という「破格の人」(やすら樹、長島先生)の内観道に導かれ、「自立して世間の荒波にもまれながら内観をする必要性を感じ」られて、北陸の地に内観研修所を開設され、一家とともに内観三昧の日々を送つて来られたのです。平成21年秋の脾臓癌であることがわかった後も取り乱すことなく、癌とともに死を見つめる毎日を送られ、「南無無大菩薩」の境地に至られ、平成22年5月21日大往生をされたのです。

ここに内観学会理事会の弔電を披露させて戴き、長島正博先生のご遺徳を偲びご冥福を心よりお祈りします。 合掌

「突然の悲報に接し、誠に痛惜の念でいっぱいです。ご家族皆様のご心痛をお察し申し上げますとともに、在りし日を偲び心からご冥福をお祈りいたします。

長島正博先生の内観、内観学会への功績には測り知れないものがあります。先生は幾多の人達を内観で救済するだけでなく、内観の普及に努められ、自己発見会を育成し、内観学会の開催、その他世界にも進出され、大きな功績を残しました。先生は、この度の病に倒られてからも、内観の指導を最優先し、その内観三昧の生き方は私達を圧倒するものでした。私達は今後とも先生の御遺訓を生かし内観の啓発、全世界への内観の普及をできる限り諦めていきたく思います。

ありがとうございます。長島先生、どうぞ安らかにお休み下さい。そして、内観、内観学会の今後をお見守り下さいますようお願い申し上げます。

長島美稚子 様

日本内観学会理事長 巽信夫、他理事一同

「長島正博先生を偲ぶ会」のご案内

長島正博先生は、平成22年5月21日、膵臓癌のため享年63歳でご逝去されました。先生のご遺言により、49日までは内々で事を運び、内観研修所の実務の継続を第一義とし、内観者に迷惑をかけない、ということとで、6月25日の第33回日本内観学会評議員会まで学会の皆様その他にも公にせず、告別式も家族のみで密葬をされました。長島先生のご逝去を悼む気持は、ご家族の皆様には負けないくらい「さわやか会」「日本内観学会」「内観研修所協会」「日本内観医学会」、その他長島先生を知るものにとつて残念なことに違いありません。心より哀悼の意を表したいと思ひます。

つきましては、関係者合同での「長島正博先生を偲ぶ会」を開催するという「さわやか会」のご提案に、前記の各学会、研修所協会が協賛し、合同で「長島正博先生を偲ぶ会」を開催し、長島先生を追悼したいと思います。

なお、平成22年9月18日当日は、日本内観医学会が同会場で開催されており、その学会の特別講演Ⅱとして午後4時～4時半、「南無痛大菩薩—死を見つめる内観—」が、長島正博先生の録画、長島美稚子先生のお話で行われる予定です。ご参加には日本内観医学会参加費が必要ということになっていますので、注意下さい。

「長島正博先生を偲ぶ会」は、同日午後5時30分より、富山国際会議場第201、202号室にて開催され、引き続き食事が、市民プラザ1Fカフェテリア・フェリーチエにて開催されます。食事に参加される方は会費7,000円が必要です。詳細は北陸内観懇話会さわやか会のホームページを参照下さい。

第13回日本内観医学会総会のご案内

会 期：2010年9月18日（土曜日）本大会・総会
会 場：富山国際会議場（富山市大手町1-2）
〒930-0084 富山市大手町1番2号

Tel: 076-424-5931 Fax: 076-493-7170

大会長：吉本博昭（富山市民病院精神科）

大会テーマ：「求められ応えられる内観療法を目指して」

主 催：日本内観医学会

後 援：富山県精神科医会・精神科病院協会・富山県医師会

プログラム

9：20～12：00 一般演題
13：00～14：00 特別講演：「うつ」の理解と治療最前線

金沢大学名誉教授 越野 好文

14：00～16：00 シンポジウム：「うつ」への内観（療法）—その展開と課題—

（シンポジスト：草野亮、本山陽一、宮崎邦彦、田代修司）

16：00～16：30 *特別講演：「南無痛大菩薩—死を見つめる内観—」

北陸内観研修所所長 長島正博（代理講演：長島美稚子）

17：30～19：30 **「長島正博先生を偲ぶ会」（さわやか会主催）201・202号室

19：30～21：30 ***「食事に参加される方」

参加費：会員5,000円 非会員5,000円 学生2,000円

事前登録（8月30日まで）は会員、非会員とも4,500円、学生1,500円

（但し、会員には抄録集が配布されます）

懇親会費：7,000円

弁当代：1,000円（お茶付）

大会事務局：富山市民病院精神科内日本内観医学会 第13回大会事務局
(076-422-1112)

事務局 長：山野俊一（富山市民病院・臨床心理士）

副事務局長：松山文夫（北陸内観懇話会事務局長）

mailto: 13naikan@tch.toyama.toyama.jp

HP: http://www.13naikanigaku.sakura.ne.jp/

* 長島正博先生の生前資料などご提供戴き「死を見つめた内観」について、長島美稚子先生にお話戴きます。なお、この講演は日本内観医学会の一部として行われますので、日本内観医学会への参加費が必要です。

** 「長島正博先生を偲ぶ会」が日本内観医学会とは別に、主催：北陸内観懇話会さわやか会、共催：日本内観学会・自己発見の会・内観研修所協会 で富山国際会議場201・202号にて開催されます。日本内観医学会への参加費は不要です。

*** 「長島正博先生を偲ぶ会」の食事は日本内観医学会懇親会と合同開催です。会場は、市民プラザ1F カフェテリア・フェリーチエです。日本内観医学会総会の懇親会費、偲ぶ会の参加費用7,000円の支払いをされた方のみ参加できます。

第二十二回 内観療法ワークショップのご案内

日時：2010年10月30日(土)～31日(日)

会場：川崎医療福祉大学・講義棟

〒701-0193 岡山県倉敷市松島288

大会テーマ：広がり確かかなものに

ープログラムー

1日目 開始12時45分

☆講演1 「自己理解と自己革新の方法としての内観」

三木善彦 (帝塚山大学教授、大阪大学名誉教授)

☆講演2 「嗜癖に走る現代人の素顔に迫る」

竹元隆洋 (指宿竹元病院院長)

☆シンポジウム

「身体内観のすすめ」高口憲章 (メンタルクリニック滴水苑院長)

「病院チャプレンの経験から」

千石真理 (浄土真宗本願寺派僧侶、医学博士)

「少年院での実践から」橋本健生 (岡山少年院専門官)

「学校教育での実践から」国只誠 (定時制高校教諭)

☆内観実習

「面接」本山陽一 (白金台内観研修所所長)、林孝次 (山陽内観研修所所長)

2日目 開始9時 終了予定12時

☆講演3 「援助者の抱える病を見つめてー自らの病理をどう扱うかー」

河本泰信 (岡山県精神科医療センター院長補佐)

☆講演4 「外国人の内観について」デイヴィッド・K・レイノルズ

(オホソノ州 Constructive Living Center所長)

お問い合わせ (E-mailまたはFAXより)連絡ください

笹野友寿 (〒701-0193 岡山県倉敷市松島288 川崎医療福祉大学)

E-mail: sasano@mw.kawasaki-m.ac.jp

FAX: 086-464-1109

広報編集委員

塚崎 稔 (三和中央病院)

木村 秀子 (米子内観研修所)

本山陽一 (白金台内観研修所)

原稿の送り先

〒108-0071 東京都港区白金台3-13-18 白金台内観研修所

TEL 03-54447-2705

FAX 03-54447-2706

E-mail zan25224@nifty.com

第三十四回日本内観学会 東京大会のご案内

平成二十三年六月に左記の日程で第三十四回日本内観学会を文
教大学越谷キャンパス (埼玉県越谷市) で開催いたします。総合
テーマは「内観実践の広がり」と本質」といたしました。

大学を会場として開催する大会として内観を学問的にとらえる
視点を持ちつつ、同時に各地の内観実践の場や、ひとりひとりの
内観者の実践を尊重しながら、内観について語り合い、考え合う
大会になればと思っております。

どうぞ、たくさんの方に次期大会へご参加くださいますよう、
ご案内申し上げます。

大会テーマ 「内観実践の広がり」と本質」

日程 平成二十三年六月二十四日(金)～六月二十六日(日)

場所 文教大学越谷キャンパス

埼玉県越谷市南荻島3337 TEL 048-974-8811

(東武伊勢崎線北越谷駅から徒歩約10分。都心からおよそ1時間)

【お問い合わせ】

事務局 白金台内観研修所

〒108-0071 東京都港区白金台3-13-18

TEL 03-5447-2705 ファックス03-5447-2706

E-mail zan25224@nifty.com

大会長 小林 孝雄 (文教大学)

事務局長 本山 陽一 (白金台内観研修所)